歴史と民俗41

神奈川大学日本常民文化研究所論集 41

2024 年 7 月 10 日発行
神奈川大学日本常民文化研究所編
発行所　株式会社平凡社

［要旨集］

■特集 民具研究と考古学

考古学と民具研究

櫻井準也

【要旨】

以前から物質資料を扱う研究分野で「兄弟関係」とみなされていた考古学と民具研究の関係は、一九六〇年代以降『物質文化』誌上などで互いの長所や短所が議論され、両者は「物質文化学」や「物質文化史学」といった名称で統合されるべきという議論があった。その後、民俗学や民具学の研究成果が先史考古学に援用され、考古学研究者や民俗学・民具学研究者によって考古学と民俗学・民具学との関係が論じられたが、民具と時間的に近い遺物を扱う近世考古学が確立したのちも両者の関係が密になったとはいえない。しかし、資料の実測図作成や使用痕観察などモノ研究を主導する考古学と民具研究には共通する方法論的課題も多い。民具学と同時代の物質文化研究を実践し、民俗学・民具学・文化人類学・社会学などの隣接分野との関係を重視する新たな研究分野である近現代考古学が近年注目されており、これらの諸分野を横断した「物質文化学」の構築に寄与することが期待されている。

台湾原住民族研究と博物館資料
――鹿野忠雄が収集した学術資料の過去と現在

野林厚志

【要旨】

博物館に収蔵されている資料はそれがおかれた脈絡によって様々な意義をもち、それは時代によっても変化していく。博物館の資料やコレクションに新たな意義を求めるためには、従来の調査や研究において採用されていた方法や観点だけでなく、資料のもつ潜在的な価値を引き出すための方法論的な議論が求められる。

本稿では、学術資料としての属性と文化資源としての属性をもつ民族誌コレクションがどのように研究され、どのように活用されてきたかを紹介し、コレクションの潜在的な価値をひきだすための議論を深める。具体的にとりあげるのは、国立民族学博物館に収蔵されている鹿野忠雄が収集、研究した台湾に関連する資料である。鹿野がかつて抱いた台湾の遠い過去への関心と、現在の台湾の原住民族の人たちがもつ近い過去への関心が、民族誌コレクションを通じて交差し、台湾原住民族の人々にとって未来の新たな価値を引き出す資源になっていることを論じる。

新しい時代のモノと民具研究
――その対象と方法を考える

角南聡一郎

【要旨】

新しい時代のモノにまつわる事例（新しい素材、ファミコン、横井庄一製作の道具、ユニバーサルデザイン／インクルーシブデザイン、福祉用具、義肢装具）を、来（きた）るべき民具研究の対象と方法を考えるために紹介した。また、急速にデジタル化する社会を鑑みて、デジタルなモノとアナログなモノとの関係について整理を試みた。続いて小学三年生の社会科で実施される「昔の道具調べ」の参考図書である、こども用図鑑の分析をおこなった。ここで導きだされるのは、歴史的ノスタルジア感情をどのように活用するか、昭和の生活がエコであるというような、それらを学ぶ意味を、平成以降のレトロなモノにも見出す必要があることだ。何よりもこのような動きを一つの好機ととらえ、民具研究者自身が価値観を変えなければならないことを、こども用図鑑は教えてくれているのではなかろうか。未来の民具研究について考えようとするならば、遠い過去のモノもそうであるが、近い過去のモノについて、そして現在のモノについて調査研究することが肝要であると考える。

アチック・ミューゼアムの
民具研究における実測図
――考古資料の実測図との対比から見たその特質

太田原　潤

【要旨】

アチック・ミューゼアムによる本格的な民具研究が始められた頃、民具の図化においても注目すべき動きがあった。民具に関する最初の共同研究でもある「所謂足半（あしなか）に就いて〔豫報〕」においてはＸ線写真の活用が特筆される。これは後に進展する、考古資料などの文化財へのＸ線活用の嚆矢でもあった。今和次郎による道具の使用痕への着目も初期の民具研究に始まり、後に考古資料の研究で開花したという点において似た側面があるが、今の「カケ茶碗多数」は、濱田耕作の『通論考古学』に示された実測図の考え方が意識的に取り入れられている点も注目される。考古資料の実測図は、『通論考古学』以降、その考え方が踏襲されて進展したのに対し、民具においては杉山寿栄男（すえお）の図にその影響が垣間見える一方、同じ頃に描かれた染木煦（あつし）の『輪樏（わかんじき）』収載の図には影響が見られない。

染木の図が独特の存在感を放つのは、彼が民具研究者としての視点を持っていたことに加えて画家としての表現力と、それを伝える技術を有していたことにある。ただ、それが個人的力量に依拠したものであったが故に、方法的に後進に継承されるものとはならなかった。

教育における民具研究と考古学

小島摩文

【要旨】

筆者に与えられたテーマは「教育における民具研究と考古学」であった。具体的には、筆者が大学院生として関わった鹿児島大学における民俗学と考古学との両方を学ぶ講座の在り方について、そのカリキュラムの一端と、そこで教育を受けた学生が博物館学芸員や行政の文化財担当者、大学教員などになっていることなどを紹介し、民俗学と考古学の協働の意味をさぐる。

また、当日の総合討議で民具研究と考古学の統合などの話題も出た。筆者は、それにことさら反対しないが、本論では、民具研究の他の物質文化研究と異なる特徴としての方法論と、研究対象としての民具について考えてみた。

埋蔵文化財と有形民俗文化財のはざまで
――自治体における実践から

岩井顕彦

【要旨】

兵庫県たつの市龍野伝統的建造物群保存地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地（いわゆる遺跡）龍野城下町遺跡の範囲とほぼ重なっている。そのため、「近世の瓦」であれば、地下か地表か、存在した位置によって文化財の種別も取り扱いも異なる。

廃棄され、地下に存在する埋蔵文化財よりも、屋根の上にあり、現在も使用されている瓦の方が概して保存状態は良好で、歴史資料としてみれば価値が劣るとはいえない。しかし、広義の有形民俗文化財にあたる現役の瓦を積極的に保護することは現実問題として難しかった。

特に、中小の自治体では、文化財保護行政の抱える案件の多様化や複雑化に人員、人材の補充が追い付かず、さらには、文化財収蔵庫の不足など厳しい状況下にある。そのため、新たな取り組みを始めるには、組織を動かす論理、人事異動を経ても継続できる仕組み作りが必要である。

こうしたなかで、近世から近代の現役の瓦の収集の仕組みを作ろうとした一職員の模索と現状を紹介する。

紐と「張り構造」の技術論とその世界観

後藤　明

【要旨】

本稿はまず最近翻訳されて話題を呼んだ著作『万物の黎明』から技術のアナロジー、すなわち異なったモノ作りの中に見られる共通の技術過程が、「移行」や「応用」を経て、技術の習得に重要であるという点を論ずる。さらに技術の習得過程には技術そのものの性格、社会的足場、そして言語も関係することを論ずる。次にＴ・インゴルドの議論に沿って、「張り構造」的モノ作りについてミクロネシアの紐作り、ベトナムの竹製筌作りの事例を紹介する。すなわち民具は製作者がもっている青写真に沿って作られるのではなく、物質の性質、人間の動作、そして目的とされる人工物の構造などの相互作用からなる形態・創出プロセスの結果であることを論ずる。そして個々の文化のモノ作りには背景に「世界観」が存在し、民具研究を考古学に連結させるためにもそのような視点が必要であることを論ずる。

博物館における現代の民具の利用について

西連寺　匠

【要旨】

近年、博物館等で高度経済成長期以降に製造された大量生産品の生活用具が収蔵・展示される例が見られる。一方で地域博物館では収蔵機能が限界となり、新たな民具資料を受け入れることができない状況にある。本稿ではまず、筆者が学芸員として活動するなかで、高度経済成長期以降の大量生産された生活用具を扱う際に感じた課題について現状を把握する。次に現代の民具ともいえる資料は、調査研究を行う際にどのような位置づけとなるか企画展を行うなかで得られたことから考察する。最後に、現代の民具を研究するなかで起きる問題点について指摘し、製造した企業とどのような関係を築くべきかについて述べる。また、上記のことを踏まえ、企業・個人・コレクターと博物館で相互に協力して現代の民具を保存していく方法について考察する。